

泌 尿 器 科 紀 要

第 6 巻 第 9 号

昭和 35 年 9 月

随 想

教授就任 10 周年を迎えて

京都大学教授 稲 田 務

昭和 3 年に、私は京大医学部を卒業して内科に入局した。それが後に泌尿器科に転向した理由を考えてみると次のような事が挙げられる。第一に、数年間内科を勉強している内に、何だか物足らぬような気がして来た。本当はそんな事がある筈はないのであるが、内科にては診断を付けるのに推理はするけれども、果して適中しているかどうかが判然としない場合が多いように思われ、又、治療を加えるけれども、その治療によつて癒つたのか或は単に自然治癒を補助したのであるかと云う事に自信が持てないような気になつた。もつと確実な診断が付けたく、又、積極的に自分で癒したと云うような治療が行いたいように思つた。第二に、自分の関心が腎臓に多く、研究テーマも腎臓に関するものであつた。第三に、指導の松尾教授の御抱負として、専門分科が従来のように横になつているよりも、むしろ縦にあるべきであるとの事、例えば内科、外科と云う分け方よりも、腎臓病学として、いやしくも腎臓の疾患である限りは、内科的疾患でも外科的疾患でも一人の医師が取扱うのがよいとのお考えであり、私に、泌尿器科へ行つて外科的腎疾患を勉強して、このような意味での腎臓の専門家になつたらどうかと云われ、私もそれに共鳴したことである。その当時には、泌尿器科の手技を覚えたならば、内科へ帰つて膀胱鏡検査、その他を実施すると云うような考えであつた。それで昭和 9 年井上五郎助教授の下にて泌尿器科の見学を始めた。然し見学と云うのでは、字義通り全くの見学で、實際的に手を下だす事が許されないので、松尾教授にも御相談して、転科、入局して本気で勉強する事になつた。そうなると新入局生と全く同様に宿直等も勿論行つた。井上先生にはきびしく鍛えられた。これではとても堪らぬから止めようかと思う事も度々あつた。然し勉強している内に泌尿器科の面白さが湧いて来た。先ず診断が甚だ正確、明瞭であるのと、更に治療法が極めて現実的であるのが気に入つた。処置と云い、手術と云い、効果てきめんであつて、いかにも自分で癒したと云う気がする。これが魅力となつて益々興味深くなつて来た。その頃、松尾教授が退職せられて内科教室の事情が變つた事もあつたが、私は内科へ帰ることは忘れて、本当に腰が据わり、根が生えてしまった。このようにして私は泌尿器科医になつた。

昭和 9 年に泌尿器科講座が新設せられ、同 13 年に井上先生は教授に就任せられ、泌尿器科の専任となられ、17 年に退官せられた。18 年に柳原教授が後任となられ、22 年に退官せられた。

戦時中から戦後にかけては、どこの教室でも同じであつたと思うが、我々の所でも数名の

医局員で教室を守っていた。私は昭和19年の秋に軍医予備員を志願して25日間入営したが当時数え歳42歳であつた。

昭和25年4月、第38回日本泌尿器科学会総会が京都に於て開催せられ、私は特別講演「排尿異常と膀胱の形態的变化」を行つた。その内容は所謂膀胱三角部異常症に関する知見を主とするものであつた。

昭和25年7月、私は教授に就任して泌尿器科教室の主任になつた。当時は戦後の混乱がまだおさまつておらず、諸事困難な点が多かつたが、従来からの在局者に加えて新入局者も段々にふえて、教室らしい活動が出来るようになった。

昭和30年3月に「泌尿器科紀要」を創刊した。基本金は全く無かつたが、とに角、年4冊発行を以て出発し、諸家の御支援によつて漸次体裁を整え、第2巻（昭和31年1月）は年6冊、第3巻（昭和32年1月）からは年12冊を発行するに至つたのである。編集業務は教室員の献身的な尽力に依つてゐるので、経営面に於ては特に余裕があるわけではないが、今後心配はない状態である。唯、原稿が充分にあることが必要であるから、将来とも諸家の御寄稿をお願いする次第である。

昭和30年4月に、第14回日本医学会総会が京都で開催せられ、同時に第43回日本泌尿器科学会総会が行われて、私は会長に推挙せられ、宿題報告「尿石症の臨床と実験」を行つた。

昭和33年9月20日、第1回日本泌尿器科学会関西地方会が京都ステーションホテルにて開かれた。これは楠教授と私とが主唱し、関西地方の斯学有志の協賛を得て設立されたものである。

昭和34年4月に、第15回日本医学会総会が東京に開かれ、その学術集会講演として、私は「尿石症の本邦統計と尿石成因に関する考察」を述べた。

昭和35年7月を以て、私の教授就任後10年を経過するので、教室関係者、その他によつて、その記念事業が行われた。その一つとして記念学会が行われ、本誌本号はその特集号であつて、その時の特別講演は本号に掲載せられている通りである。

自分の事を多く書き過ぎたようで恐縮であるが、今日まで、とに角大過なく、教室らしい働きを続けて来ることの出来たのは、何と云つても教室員の努力の賜物である。教室員の名簿とその業績は、記念事業の業績論文目録中にまとめられている。人数は必ずしも多いとは云えぬが、和を以て強く結ばれており、業績の数は必ずしも驚く程ではないが、世に問うべき価のあるものも少くない事を、ひそかに自負しているのである。その他に、教室員の共同執筆に成る書「泌尿器科診断と治療」があり、これは教室に於ける興味ある症例をまとめたものである。

10年を顧みると、長いようでもあり、短いようでもある。努力をしたようでもあり、不十分であつたようでもある。おそらく、努力が足りなかつたと云うのが本当であろう。今までの業績は、一応のものであつても、まだまだ広く、更に深く掘り下げてゆかねばならぬものと思う。この10年を一区切りとし、新しい勇猛心を振るい起こして再出発せねばならぬ。

広く医界並びに泌尿器科領域を眺めると、多くの問題がある。医学生の適当な定数、新制大学院制度、インターン及び国家試験制度、研究者及び医師の待遇改善、研究費の増額、更に医療制度の混乱、健康保険と大学病院診療との関係、専門医制度等は、いずれも検討を要する重大な問題である。泌尿器科に於ては、専門科目としての完全な独立が最も緊要事である。これは大学、総合病院、更に個人開業を問わずに必要な事である。

拙筆に当り、私及び当教室に寄せられた諸家の御厚意に対して更めて感謝の意を表す次第である、